

# 圖 版 解 說

## 一三 吉備大臣入唐繪詞

卷子 紙本着色 竪三二・二種 總長二四・四二米

(以上矢代幸雄「吉備大臣入唐繪詞」参照)

## 四、傳夏圭筆山水圖

掛幅 紙本墨畫淡彩 竪四七・五種 横一一五・五種

(脇本十九郎「夏圭畫と傳ふる淺野家の山水圖に就て」参照)

## 五、竹田筆梅花宿鳥圖

掛幅 紙本淡彩 竪一・一四米 横三〇・三種

梅花宿鳥圖は竹田が得意とする花鳥畫の優品の一である。作者の題語にいふ「文政己丑初冬の五日、大阪府の深山樓に寫す、姑く左位を虚くして山陽小竹二君の着語を俟つと云ふ」と二印、一は「憲印」、即ち文政十二年十月五日の作で、爾來竹田は天保三年の山陽の長逝に至るまで、屢、山陽と相會し、殊にこの文政十二年の十月には山陽並に篠崎小竹、後藤松陰等と共に箕面に遊び、「目撃佳趣冊」を作つた位であるから、山陽の著語を請ふ機會も屢、あつたらうに、どうしたものか、この作者の意趣は終に實現せられずして、小竹、及び山陽に代つて其門人たる松陰の題辭を見るのみとなつた。小竹が南歌子「霜重くして梅魂斷え、烟消えて月影生ず、更闌にして宿鳥寂として聲なし、妾獨り人を懷ふて寐ねず、天明に到りぬ」といふ一闋の填詞を題したのは印は「承弼」(小正竹の字)の聯印に竹田の口吻を眞似たもので、その頤を解かせたことであらう。之に對して松陰は狭い餘白に、懶眞子の別號を以て「羅浮山裏の春を識らんと欲せば、月白風香は是れ精神ぞかし。翠羽に寄言して嘈唧することを休めしめん、恐くは林

中酔ひ睡る人あらんを」といふ七言絶句を題して居る。印は「春卿」(松陰の別號)二字

竹田の所謂刻藤紙半幅か、その純白の紙面を活用して濕墨焦墨相併せて一樹の老梅の詰屈偃蹇たる姿態を畫き、樹根に岩石を添へ、その面を白く殘して叢竹の葉をあしらつて居る。而して樹幹には赭色を塗り、梅の幹や竹の葉に沿ふて淡藍を亂點して夜陰を思はせ、梢に掛かる月一痕、淡墨の地暈を抜いて白く冴えた月魄の面に、軽く數筆の雌黃を刷いて畫面に仄かな光を投げたのは、眞に心憎き色彩の配置である。而して此全幅に一段の生意を添ふるものは、翼を歛め首を縮め、夢を疎影暗香に托して穩かに樹陰に眠る三羽の小禽である。墨にちむ藍の羽色も月に映ゆるかと疑はれて、早春の夜の静けさを憶はしめるのである。

夜の花鳥、殊に宿鳥を畫きたる者、畫院の所産を始として、古今必ずしもその例に乏しくない。而かも畫格必ずしも大ならざるも、畫材の選び得て、畫法の用ひ得て、かくの如く精透なるものに至ては、竟に竹田其人の風懷に待たざるを得ない。小竹、松陰の題語、猶ほ平凡、此畫に當るに足らず、山陽が見たら、必ずや一層の驚語を下したことであつたらうに。(倉琅子)